

浜松市博物館事業評価

1 浜松市博物館運営についての考え方と事業評価

浜松市博物館では、図1のとおり、博物館の使命（ミッション）を「浜松市域の文化の継承と創造」として、3つの中短期目標（令和7年度まで）を定めた上で、それらを実現していくために必要な戦略指標を6つに分類して設定しています。

その戦略指標の達成状況を測るため、今年度は令和6年度分の事業評価を実施します。また、併せて次年度に実施する令和7年度分の評価項目や目標値などの確認を行います。

2 事業評価の方法

1～5の戦略指標ごとに、定量的評価と定性的評価の項目を定めた評価シートを作成しています。定量的評価については評価項目ごとに目標値と実績値を示し、定性的評価については、評価項目ごとにA～Dの4段階で評価を行っています。

第1回協議会（前回） 令和6年度の事業報告と併せて評価シートを提示し、実績値や自己評価について説明しました。各委員には説明を踏まえて、各指標の定性的評価の段階評価と、各評価シートへの意見等の記入をお願いしました。

第2回協議会（今回）
各委員の評価・意見を集約して提示します。それを踏まえて、今後の事業改善について意見をうかがいます。

第3回協議会（次回）
令和6年度分事業評価を年度末刊行の博物館報に掲載するため、確認をお願いします。

また、令和8年度分事業評価の項目や目標の設定等について意見をうかがいます。

※令和7年度分をもって、右記の中短期目標や戦略指標、それに伴う事業評価を終了し、令和8年度分から新たな目標・指標・事業評価項目を設定します。



事業評価のスケジュール

年度	月	協議会	内 容		
			令和6年度分事業評価	令和7年度分事業評価	令和8年度分事業評価
令和6年度	3月	第3回		<ul style="list-style-type: none"> ・事業計画案提示 ・項目、目標値の検討 	
令和7年度	4月				
	5月				
	6月				
	7月	第1回	<ul style="list-style-type: none"> ・事業報告 ・評価シート提示 	<ul style="list-style-type: none"> ・事業計画 ・項目、目標値の確認 	
	8月		 各委員の評価・意見 (第2回の前に提出)		
	9月				
	10月				
	11月	第2回	<ul style="list-style-type: none"> ・評価のとりまとめ ・今後の方策の検討 ※併せて「浜松市文化財保存活用地域計画」の事業進捗評価を実施		
	12月				
	1月				
2月	第3回	<ul style="list-style-type: none"> ・内容の最終確認 (確認後、館報へ掲載)		<ul style="list-style-type: none"> ・事業計画案提示 ・新たな目標、指標、事業評価方法の検討 	
3月					
令和8年度	4月				
	5月				
	6月	第1回		<ul style="list-style-type: none"> ・事業報告 ・評価シート提示 	<ul style="list-style-type: none"> ・事業計画 ・事業評価項目、目標値の確認
	7月				

令和6年度博物館事業評価

資料 1-2

戦略指標1 資料収集と保管・活用

・地域を特徴づける資料収集と保管 ・資料データ化と収蔵資料の充実 ・地域の文化を地域で保管活用

定量的評価

No.	内容	単位	R4 実績値	R5 実績値	R6 目標値	R6 実績値	考え方・基準	R6内訳等説明
1	収蔵資料台帳のデジタル化件数（累計）	件	88,916	81,410	82,840	82,680	年度末時点のデジタル台帳登録件数（当初の中期目標はR7年度までに10万件だったが、R5の件数修正によって困難となっている）	R5に件数が修正されて大きく減少した中で、舞阪町資料の台帳化等により目標値近くまで実施することができた。
2	新規受入資料の展示公開率	%	26	18	40	47	当該年度とその前年度（R5・6年度）の公開可能な受入資料のうち、展示、刊行物、オンライン上などで紹介した件数の比率	R5年度5/11+R6年度3/6=8/17 ・整理や調査、修繕を要するなど、速報的な公開に適さない資料を分母の件数から除外
3	収蔵品オンライン検索システム「ある蔵」における公開件数（累計）	件	12,004	11,996	12,120	-	年度末時点の「ある蔵」公開件数（当初の中期目標：R7年度までに12,500件だったが、抜本的見直しにより困難になっている）	内容の重複、誤記等の抜本的修正のため休止中。
4	館内収蔵庫の点検・清掃回数	件	12	12	12	12	温湿度等環境の点検及び庫内清掃の回数	温湿度の点検を月に1回行い、適宜除湿、放熱、清掃等を実施した。
5	資料事故発生件数	件	0	1	0	0	資料の紛失、破損、汚損等の件数	該当なし

定性的評価（A達成 Bおおむね達成 Cもう少しで達成 D達成していない -該当なし）

No.	評価項目	R5 自己 評価	R5 委員 評価	R6 自己 評価	R6 委員 評価	判断基準	自己評価理由
1	計画的な資料収集が行われている。	A	A5人 B2人	A	A7人 B1人	資料収集方針・資料購入基準に基づいている。	・方針・基準に基づき収集した。
		A		現状の収蔵環境を踏まえて、収集検討会議により受入を決定し、会議記録を残している。		・収集検討会議を毎回開催し、記録を残した。	
		-		-		資料購入評価会の構成員をあらかじめ想定し、すぐに対応できるようにしている。	・博物館協議会や文化財保護審議会経験者を想定していたが、該当案件がなかった。
2	資料の保管が確実になされ、良好な状態に保たれている。	B	B2人 C5人	B	B5人 C3人	資料管理のフローチャートが運用されている。	・概ねフローチャートに沿って適切に行われた。
		A		A		収蔵庫の鍵の管理や機械警備の運用が厳格に行われている。	・鍵は施錠式キーボックスに収納、使用時は他者確認を必須、閉館時に有無確認。 ・機械警備は夜間全館、通常時は収蔵庫のみ実施。
		C		C		資料の収蔵場所を明確にするとともに、その場所への収蔵が確実にされている。	・使用資料の原位置収納を複数人による確認で実施。 ・以前から乱れている部分は、改善の途上。
		D		C		全ての収蔵施設におけるデジタル台帳作成が計画的に行われている。	・台帳未整備の外部収蔵施設のデジタル台帳作成を再開、途上。
3	全ての収蔵施設が計画的に運用されている。	B	B1人 C6人	B	B4人 C4人	収蔵庫の温湿度を常に計測し、必要な措置を講じている。	・常時温湿度を計測し必要に応じて扉の開放による放熱や移動式除湿機等に対応。
		C		C		全ての収蔵施設について毎年現地点検を行い、必要な措置を講じている。	・出先担当職員との協力を得ながら全ての収蔵施設で現地点検を行い、課題の抽出を行った。
						全ての収蔵施設の資料を把握し、将来的な再配置の方針が検討されている。	・外部収蔵施設の資料把握を実施中だが、数年を要する。再配置方針は今後検討。

4	収蔵資料の活用と見直し が図られている。	B	B4人 C3人	C	B2人 C6人	デジタルデータの公開活用が推進されている。	・「ある蔵」や「文化遺産デジタルアーカイブ」で推進。「ある蔵」が内容の修正を要し休止中。
		C		C		未整理資料や再整理を要する資料の活用に向けた確認・整理作業が推進されている。	・未整理・要再整理資料の状況は確認できており、再整理など進めているが、量が非常に多く短期的な解消は困難である。
		A		A		他館への資料貸出、画像提供、資料熟覧への対応が内規に基づいて適切に行われている。	・適切に対応した。
		A		A		廃棄・移管・返却等に係る除籍手続きが基準に基づいて適切に行われている。	・除籍の基準に基づき、検討会議を開催して1件の除籍（廃棄）を決定した。

自己評価

分析・課題	【収集】 収集方針・購入基準に基づき、収集検討会議に経緯や理由等の記録を残すなど適切に行った。収蔵容量が飽和している中で、救済的に収集が必要な資料の受入判断が難しい。
	【保管】 防犯体制の確保、収蔵庫の環境維持、資料の出納など現状の設備の範囲で可能な管理は行っている。外部施設を含めた未登録資料の台帳化、既存台帳の不備修正、不適切な収納状況の改善、飽和状態の収蔵施設の見直しなど、過去から蓄積した課題が膨大で、その解消には抜本的かつ中長期的な取組みを要する。
	【活用】 資料の貸出、熟覧、画像利用などへの対応は適切に行われた。収蔵資料の検索システム「ある蔵」は内容に誤りが多く、修正のため休止が続いており、早期の復旧が必要である。

博物館協議会委員の評価・意見

<p>【収 集】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・収集方針・購入基準に基づく資料収集は重要であるが、社会状況の変化に伴い資料の滅失・散逸が進んでいるなかで、緊急避難的に収集すべき資料は増え続けていくと思われる。地域に根差した博物館として、それらへの対応を早急に検討する必要がある。 ・資料収集方針・資料購入基準に基づいた資料収集がなされていることは評価できる(定性1)。 <p>【保 管】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・史料台帳の整備のような重要かつ基本的な事柄への人員配置や予算措置を講じる必要があるのではないかと。また、「ある蔵」再開への予定を示すことや、完璧な状態ではなくとも公開・利用を可能にするような方法を考える必要があるのではないかと。 ・使用資料をもとの位置に収納していることやそれを複数人が確認していることも評価できる。ただ以前のものがまだ改善途上であることは課題である(定性2)。 ・外部収蔵施設の資料把握をしていることは評価できるが、再配置方針について未検討であることは課題(定性3)。 ・資料を定位置に置くことは、紛失などがないようにするためにも、また紛失時にすぐ気づくためにも必須であろう。現在の取り組みは評価できるが、以前から乱れている部分についても早急に対応する必要がある。 ・収蔵庫の温湿度を常に計測し、必要な措置を講じていることは評価できるが、予算を要することとはいえ、空調設備の必要性については、文化財課や浜松市に強く働きかけ、文化財の保護のために必須であることを繰り返し伝える必要がある。 ・未整理・要再整理資料の再整理を計画的に進めること。 ・評価項目2の資料の保管について、令和5年度より改善された点については評価できるが、資料の収蔵場所の明確化やデジタル台帳の作成について評価が低く、博物館にとって非常に重要な部分であるため改善が必要である。ただし、そのための人員が充分でないのであれば、増員など根本的な対策が必要であると考える。 ・本館のみならず、分館を含むすべての収蔵施設における点検および資料把握の作業は、これに携わる人員・人材の確保とも密接に関わる、極めて大きな負担を伴う業務であると考え。職員のみで対応する場合、数年単位の時間を要するのもしやむを得ない状況であろう。しかしながら、同じく長期的な取組となるのであれば、たとえば大学の学芸員課程と連携し、履修学生の実習機会として当該作業を位置づけることも一案ではないかと。 ・他館への資料貸出等が適切に行われていることは評価できる。 ・未整理資料の整理や収蔵管理システム「ある蔵」の修正は一朝一夕には解決しない。資料管理(収集・整理・保管・貸出等の出庫・閲覧対応)を専門にする部署(あるいは係)の設置、コレクション管理専従の職員を配置するなど、組織体制から見直す必要がある。人員体制の構築は館だけではできない。収蔵管理の重要性を市民に理解してもらいつつ、問題意識を共有する取組みを進めてもらいたい。収蔵庫の現状を公開し、資料整理のプロセスを展示で紹介するなど、飽和状態の収蔵庫改善に向けた取組みを実践することを期待する。 <p>【活 用】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ある蔵」が休止中であることは残念。 ・「ある蔵」の復帰を早急にする必要がある。 ・デジタルデータの利活用を図る上で、「ある蔵」は単純な復旧ではなく、扱えるデータの種類がより広く、検索の利便性と他機関との横断検索の可能性を持つ別のシステムへの置き換えを検討してはどうかか。 ・「ある蔵」の早期復旧を期待する。 ・収蔵や公開におけるデジタルの推進をより一層進め、博物館の価値を高めていってほしい。
--

今後の方策(案)

<p>【収集】 ・限られた収蔵容量を見据えながら、地域に残る歴史資料の滅失・散逸の防止に努めていく。</p> <p>【保管】 ・台帳の整備や資料管理に人員と予算を重点的に配分し、最重要業務として推進していく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中長期的課題(未整理資料の整理、収蔵施設の再配置、収蔵庫の空調機能、収蔵容量の飽和状態)への対策を多角的な視点から検討していく。 <p>【活用】 ・収蔵資料検索システム「ある蔵」の修正や利便性の改善を進めるとともに、資料情報公開のより良いあり方を検討していく。</p>
--

戦略指標2 調査研究

・学芸員の質の向上 ・地域の研究機関との共同研究 ・地域資料の掘り起こし

定量的評価

No.	内容	単位	R4 実績値	R5 実績値	R6 目標値	R6 実績値	考え方・基準	R6内訳等説明
1	学芸員が講演・講座等の講師を務めた件数（外部での実施を含む）	件	19	11	15	30	外部での研究発表や出前講座も含む。連続講座は1回。ギャラリートーク、展示解説は非該当。	館内講座11 館外からの依頼19
2	学芸員の学術的著述本数（外部での掲載を含む）	本	6	5	3	2	館報・図録・報告書や、外部研究誌等へ記名の著述掲載本数。連載は1本。2年目以降の学芸員1人1本目標。	学芸員A：1本（外部1）、学芸員B：1本（館報1）
3	学芸員が調査に向いた件数	件	27	35	20	41	外部での資料調査、熟覧、視察など。同一調査に複数回でも1件。	
4	他機関と連携した調査研究の件数	件	5	4	6	4	大学、機関、研究者等との調査研究連携件数。イベント等のみは含まない。	静岡文芸大（染色型紙）、大橋幡岩資料調査プロジェクト（大橋ピアノ）、市科学館（伊場遺跡木甲）、研究者等（伊場遺跡5世紀資料）

定性的評価（A達成 Bおおむね達成 Cもう少しで達成 D達成していない）

No.	評価項目	R5 自己 評価	R5 委員 評価	R6 自己 評価	R6 委員 評価	判断基準	自己評価理由
1	調査研究が学芸員の重要な業務の一つとして位置づけられている。	C	C7人	B	B6人 C2人	調査研究とその他業務における適切な業務量の配分と分担がされている。	・調査研究の必要性は共有され、他業務との配分も是正を進めているが、まだ資料整理に配分が取られている。
2	調査研究の環境が保たれている。	C	B2人 C5人	C	A1人 B3人 C4人	調査研究に必要なスペースが確保され、機材が適切に配備されている。	・館内の物品整理を進め、現状の環境の可能な範囲で調査研究スペースの確保に努めた。 ・マイクロフィルムリーダーを更新した。
		C		調査研究スペースにおいて整理・整頓が日常的に行われている。		・資料研究室と写場の整理を実施。整理・整頓の実施は継続中である。	
		B		調査、視察、研修、有識者指導など学芸員の資質向上に必要な予算が確保され、積極的に活用されている。		・図書購入費や有識者の謝礼・出張費等の予算はおおむね確保され、有効に活用した。	
3	調査研究が適切な内容・方法で行われている。	B	A1人 B5人 C1人	B	B8人	設定されたテーマに基づいて質の保たれた調査研究が計画的に行われ、講座等で市民に還元している。	・型紙調査は報告書を刊行。 ・「蛭塚遺跡」は再整理等進めた内容をクリアファイルとして販売した。 ・担当職員が調査を進めた内容で展示や講座を行った。
		B		学芸員が外部機関との共同研究に参画している		・「機械染色の型紙」は大学側と覚書を締結して整理作業等を行った。	

自己評価

分析・課題	<ul style="list-style-type: none">・学芸員が資料管理の改善に重点的に取り組む中で、調査研究スペースも十分ではない中でも、調査研究の重要性についての共有は図れてきた。講座の講師対応や学術的著述、資料調査は精力的に行われた。・調査研究のうち「機械染色の型紙の整理・研究」は報告書、「蜷塚遺跡」は遺構配置を示したクリアファイルの販売で市民へ還元した。その他「伊場遺跡群」、「浜松城」、静岡文化芸術大学との「浜松の染色の型紙」共同研究など継続中の調査研究については、タイミングを見ながら成果を公開していく。・外部機関との連携した調査研究は行われているが、担当学芸員の専門外の分野が多いこともあり、資料の提供や基礎作業が中心になりがちである。
-------	---

博物館協議会委員からの評価・意見

<p>【位置づけ、時間や場所の確保】</p> <ul style="list-style-type: none">・資料整理は学芸員にとって重要な仕事の一つであるが、それが調査研究の時間を圧迫しているのであれば、人員を増やすなどの措置をとる必要があるのではないか。・学芸員が調査研究を行う必要性について認識されていることは評価できるが、他業務、特に資料整理に時間がとられていることは仕方ないこととはいえ、調査研究を十分に行う環境が整っているとは言えないと考えられる。・過渡期とはいえ、資料の整理や資料を定位置におくことを現状の職員のみで行うことには無理があるのではないか。職員経験者を非常勤で雇用し整理などにあたってもらうなど、外部化をしながら作業を進めるなどする必要があるように思われる。・近年、調査研究が学芸員の重要な業務の一つとして、これまで以上に明確に位置づけられるようになってきた点は評価できる。しかしながら、「調査研究の環境が十分に確保されているか」と問われれば、依然として改善の余地があると考えられる。・学芸員の負担が大きくならなければよい。調査研究スペースが足りない中で共有できていたのは良いこと。・明確に努力の結果が見られる部分である。継続して改善していけるよう希望する。・学芸員の調査研究の重要性について共有されている点について評価できる。 <p>【成果の還元】</p> <ul style="list-style-type: none">・少ない人員で収蔵庫の整理や展示といった博物館業務をこなしながらだと、調査研究に割く時間は自ずと限られてくる。調査研究は博物館の基本的な機能の根幹をなすもの。展示、報告書、論文、ギャラリー・トーク、SNSなど、あらゆるチャンネルを駆使して、市民に向けた還元方法を工夫してもらいたい。・担当職員が自ら調査を進めた内容で展示や講座を行うことは、学芸員の調査研究活動を促進するものであるので計画的に継続してほしい。・型紙調査についての報告書が発刊されたこと、調査研究を展示や講座に結び付けていることは評価できる。・調査研究分野で学芸員の皆さんが精力的に活動していることがよく分かる。特に静岡文化芸術大学との共同研究による報告書が素晴らしい。 <p>【質の向上】</p> <ul style="list-style-type: none">・調査研究の成果については、市民向け講座等による還元にとどまらず、専門的学会等での発表を通じて一定の学術的評価を得ることを目指していただきたい。これにより、博物館の研究機関としての機能強化にも資するものと期待する。 <p>【外部との連携】</p> <ul style="list-style-type: none">・大学との連携は今後も積極的に進めてほしい。・学芸員が外部機関との共同研究に参画できていることは評価できるが、担当者の専門外の分野が多いことについて、改善策を示すことが必要。学芸員の専門性を活かさないことは、博物館にとっても本人にとってもマイナスとなる。

今後の方策（案）

<p>【調査研究の位置づけ、環境】</p> <ul style="list-style-type: none">・引き続き業務全体見直しや館内の整理を進め、調査研究の時間と環境の確保に努める。 <p>【成果の還元を含めた計画性】</p> <ul style="list-style-type: none">・地域の特性や課題を調査研究のテーマとして捉え、市民への成果の還元まで含めた計画を定めることで、博物館における調査研究の重要性を内外に示していく。 <p>【外部との連携・質の向上】</p> <ul style="list-style-type: none">・引き続き、外部との連携、研修や研究会への参加、視察や資料調査、有識者招聘による指導などを通じて、知識・能力の向上やネットワークの形成に努める。・中長期の調査研究を継続できる体制づくりに努める。

戦略指標3 展示・教育普及活動

・浜松市と関連のある展示の企画

・学校や地域と連携した講座やイベントの開催

定量的評価

No.	内容	単位	R4 実績値	R5 実績値	R6 目標値	R6 実績値	考え方・基準	R6内訳等説明
1	観覧者数（本館）	人	31,547	26,239	35,000	25,413	本館合計（アウトリーチを除く）	資料点検を優先し、展示や教育普及を減じたため。
2	観覧者数（分館）	人	22,859	17,599	13,000	9,129	5館合計	舞阪3,703、姫街道銅鞮3,780、浜北0、春野900、水窪746 浜北休館の影響か
3	企画展開催件数	件	8	6	7	8	特別展、テーマ展、小展示（スポット展示、外部での展示含めず）	テーマ展2件、小展示6件
4	企画展の満足度	点	7.7	7.4	7.7	8.1	アンケート（10点満点）平均値。展示毎に算出、その平均とする。	天竜川西岸の古墳時代8.24、近代の学校の姿7.92
5	分館における企画展開催件数	件	23	7	11	11	巡回展や企画展のほか、各所管部署や指定管理者主体の展示も含む。	本館主体6件、分館主体5件
6	講座開催件数	件	14	4	10	9	館主催の講演会・講座の回数。出前講座は含まず。連続講座は1回。	はまはく講座3回、館長講座、古文書入門講座（連続）、古墳見学会、子ども古文書講座、昔の学びの道具WS、城下町WS
7	体験事業満足度	%	9	8.8	8.7	9.2	アンケート（10点満点）の平均値。事業毎に算出し、その平均とする。	GW8.8、夏休9.1、冬休9.1、春休9.7
8	学校移動博物館開催件数	件	9	10	8	10	学校へ博物館職員が出向き展示・体験学習の実施	
9	教材貸出件数	件	94	92	100	86	学校等への教材用資料や体験学習用具の貸出件数。	小学校77件、中学校5件、その他4件
10	常設展内の資料更新回数	件	5	4	3	6	常設展の部分的な展示更新の回数（期間限定の展示を含む）。	
11	レファレンス対応件数	件	80	69	70	61	来館、メール、電話等による件数合計。	

定性的評価（A達成 Bおおむね達成 Cもう少しで達成 D達成していない）

No.	評価項目	R5 自己評価	R5 委員評価	R6 自己評価	R6 委員評価	判断基準	自己評価理由
1	本館は、市内の歴史文化について正確でわかりやすい解説が行われており、市内外の人びとが浜松市について理解を深められる。	C	B7人	C	A1人 B6人 C1人	常設展の魅力向上に取り組むとともに、多様性への対応（多言語・音声・ハンズオン・配置・文字サイズ・難易度等）を進めている。	・近世～近現代の展示の全面更新を行った。 ・多様性への対応がほとんど進められなかった。
		A		A		計画的な企画展の開催により、収蔵資料を効果的に公開している。	・テーマ展、小展示を予定通り開催したほか、コンコースにスポット展示コーナーを設けた。
		B		B		展示や教育普及事業において、デジタル技術を活かした効果的な事業展開を行っている。	・QRコードによる情報提供、デジタルアーカイブへ誘導 ・講座の動画配信や申込オンライン化を推進 ・双方向性の事業は未実施
		B		A		速報展など時節や市民ニーズに即応した柔軟な事業展開を行っている	・鹿形埴輪貸出前の展示、伊場遺跡群出土品の重文指定答申直後の速報展など実施
2	分館は、各地域の歴史文化について正確でわかりやすい解説が行われている。	B	B6人 C1人	B	A1人 B6人 C1人	各地域の特色を生かした常設展示が行われている。	・各地の文化財や歴史の展示をしている。 ・更新をほとんどしていない。
		B		A		各分館の地域の人々や担当者の意見や要望が、企画展示等の事業に反映されている。	・各分館担当者と調整して企画展の内容を決定している。 ・各担当や指定管理者が自主事業を実施。 ・周知に課題

3	学校の学習内容に即した見学・体験のプログラムを行うとともに、授業を支援する教材を提供している。	A	A5人 B2人 C1人	A	主に小学校3年生と6年生の学習内容に合わせた見学・体験プログラムが構成されている。	・3年生に昔の道具体験、6年生に遺跡見学や展示解説などを実施。	
		A		A		学校のニーズ等を把握し、見学・体験プログラムの改善に努めている。	学校移動博物館を学年ごとでも対応し、各学区の歴史資源の紹介に努めている。
		C		C		デジタル技術を用いたオンライン上での学習支援を進めている。	・オンラインでの学習素材の提供などを進めている。 ・子ども向けページなど検討段階で実施に至っていない。
4	市民に学びの場を提供している。	B	A1人 B6人	B	来館者が理解を深められるオンラインの活用を含めた効果的な講座や展示解説等を開催している。	・講座のオンライン配信を推進 ・教育普及事業が企画展や体験館開催時に偏りがち。	
		A		A		博物館実習をはじめ、多様な研修を受け入れている。	博物館実習、教員研修、中高生の職場体験などを受け入れた。
5	浜松の歴史や文化を題材とした体験学習事業を行っている。	A	A5人 B2人	A	展示や講座等と関連付けた体験学習事業の開催により学習の相乗効果が高められている。	銅鏡づくり、アイロン体験など常設展関連メニューのほか、鹿形植輪パーパークラフト等企画展に沿った内容で行った。	
		B		A		幅広い層が学びながら楽しめる体験学習プログラムを開発している。	・家族一緒に楽しめるメニューを用意している。 ・講座と体験学習を組み合わせるなど試行している。

自己評価

分析・課題	<ul style="list-style-type: none"> ・観覧者数は、本館資料点検業務を優先し、展示や教育普及事業を減らしたことや、分館1館が通年で臨時休館を設定したことなどにより減少した。 ・常設展は近世以降の展示更新など改善を進めているが、まだ途上である。企画展は計画通り実施することができた。 ・分館の展示については、常設展示の更新まで手が回らないのが実情である。 ・教育普及事業は、新たにさまざまな年代が参加できるような事業も試行している。 ・学校連携事業は、基本的に順調に行っている。オンライン活用があまり進んでいない（ニーズも少ない）のが課題である。
-------	---

博物館協議会委員からの評価・意見

<p>【展示の多様性への対応】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多様性への対応は一度にすべてを進めることは難しいが、特に人口が多いブラジル人向けのポルトガル語の説明を加えたり、子どもや日本語学習者のために、展示の文字をやや大きくしてフリガナを振るなどは少しずつできるのではないかと（HICEなどの協力を依頼することなども考えられる）。 ・多言語・多様性への対応は依然として重要な課題である。デジタル技術の活用も含めて、本格的に取り組む場合は人材の育成や新規採用が必要になると思われる。予算措置・研修制度など、必要な準備を進めていただきたい。 ・多様性への対応を少しずつでも進める必要があるのではないかと。 <p>【分館】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各分館における「地域の特色を生かした常設展示」は更新が滞り、企画展示も十分な成果に結びついていないように見受けられる。指標1「収集管理」で述べた意見と同様に、大学の学芸員課程と連携し、履修学生の実習機会として分館での企画展の企画・実施を検討していただきたい。 ・分館の事業が活発化してきているようであり、さらなる展開が期待できる。 ・この項目の全体評価は令和5年度に比べ改善されている。分館の各担当者や指定管理者が自主事業を実施していることは評価できる。 <p>【体験学習等教育普及】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育普及事業について、さまざまな年代が参加できるような事業を試行中とのことであるが、博物館の来館者として高校生が少ないため、体験・見学プログラムを中学校・高校へも拡大できるとよいのではないかと。ただし、人員が限られているので、学芸員の負担が大きくなりすぎる必要がある。 ・常設展示は博物館の王道である。10年変わらない同じ展示内容だと陳腐化は避けられない。博物館の未利用者に訴求する魅力的な企画やワークショップを開催できるか、学芸員の手腕が試される分野であろう。外部の団体との連携や博物館の外に飛び出した企画に取り組む等、近年は工夫が見受けられる。引き続き地域に根ざした関連イベントの実施に期待したい。 ・小学生の学年を意識した見学・体験プログラムが用意されていることや学校移動博物館を学年ごとに対応しているなど、学校向けのプログラムが充実していることや、展示や講座等と関連付けた体験学習を開催していることは大いに評価できる。 ・浜松の歴史や文化を題材とした体験学習では、家族で楽しめるメニュー作りなど工夫がみられる。 ・体験型の学習事業やプログラムの企画・実施が継続して行われている点は、高く評価できる。 <p>【学習の場の提供】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・博物館実習、教員研修、中高生の職場体験を受け入れたことは評価できる。 ・学校と博物館は多くの場面で連携しており、教職員も有意義な研修の機会が提供されている。また、休日や長期休業中に博物館で開催される体験活動などに、保護者とともに多くの児童が楽しく参加している。 ・中高生に「学芸員」という職業があることを知ってもらうことも必要。そのためにもオンラインの活用推進が必要。

今後の方策（案）

<p>【常設展】 内容の更新に継続的に取り組みながら、多言語化など多様な観覧者を受け入れられる展示手法を整えていく。</p> <p>【企画展】 市民のニーズを踏まえつつ、資料整理や調査研究の成果を活かして企画展を開催する。</p> <p>【教育普及】 外部とも連携しながら、幅広い層に届く工夫を行い、浜松の歴史の魅力を幅広く伝えていく。</p> <p>【学校連携】 校外学習の来館を促進しながら、移動博物館や職業体験、ICTなど学習手段の多元化を進めていく。</p> <p>【分館】 地域や学校等と協力して、分館や収蔵施設で地域に根ざした展示・教育普及を進めていく。</p>
--

戦略指標4 市民協働

・地域を特徴づける資料収集と保管 ・資料データ化と収蔵資料の充実 ・地域の文化を地域で保管活用

定量的評価

No.	内容	単位	R4 実績値	R5 実績値	R6 目標値	R6 実績値	考え方・基準	R6内訳等説明
1	地域団体等と連携した事業の実施件数	件	3	3	3	4	自治会や市民団体等との連携による館内・蛸塚公園・伊場公園を利用したイベントなど（連続するものは1件）	夏祭り・タケノコ掘り・節分イベント（自治会）、昔話の語り聞かせ（市民団体）
2	市民参加型事業の開催件数	件	2	0	2	0	共同調査、意見聴取型WS、協業などの件数	該当なし
3	出張展示開催件数	件	1	1	3	2	外部の店舗や施設から依頼を受けて出張展示を行った件数	都田図書館と民間金融機関の2か所実施。
4	出前講座等開催件数	件	11	7	10	31	依頼を受けて講座に出向いた件数	
5	他団体共催事業件数	件	3	1	5	4	展示、講座、イベント等で調査研究は含まない。	お話つむぎの会（旧高山家住宅で昔話の語り）、浜松・浜名湖ツーリズムビューロー（ピアン）、水辺から細解く佐鳴湖の歴史実行委員会（縄文人とミズベの暮らし）、博物館活用促進実行委員会（しじみ貝塚づくり）
6	ボランティア参加延べ人数	人	356	357	450	348	ボランティアの延べ活動人数（研修除く）	・主な活動である体験学習事業の日数を減らしているため。
7	ボランティア養成事業開催回数	回	10	5	6	4	講座、報告会、実習等の資質向上に関する事業の開催回数	・研修3回・説明会1回のほか、随時講座への優先参加など自主研修の機会を提供。

定性的評価（A達成 Bおおむね達成 Cもう少しで達成 D達成していない）

No.	評価項目	R5 自己評価	R5 委員評価	R6 自己評価	R6 委員評価	判断基準	自己評価理由
1	博物館の事業運営をボランティアなど市民協働で推進している。	B	B7人	B	B8人	ボランティアの募集・育成・活動の拡充を進めている。	・ポスターやHP等で募集し、講座で育成し、教育普及の補助や展示ガイド等を行っている。 ・主要人材や内容が固定化し、高齢化も進む。
		B		B		ボランティアにインセンティブ（講座等事業の優先参加や個別サービス等）や企画提案の場を用意するなど意欲向上の取り組みを進めている。	・教育普及では運営補助を依頼しながら一般申込より優先的に参加させている。 ボランティアの企画提案による事業は多くない。
		B		B		シティプロモーションを意識した事業展開を官民連携も含めて進めている。	・重文指定答申直後の速報展など実施。
2	博物館の事業が、新たな文化創造や社会の課題解決に寄与している。	B	B4人 C3人	B	B5人 C3人	市民団体等に博物館や蛸塚公園でのユニークバリエーションを促進している。	・結婚式や七五三の前撮りやユーチューブの撮影等で活用されている。 ・ピアノコンサートを実施。 ・使用ルールが明確でない。
		C		C		社会の課題解決に向けた事業展開を図っている。	・障害者等の受入れはソフト面では個別対応している。 ・ハード面の対応（音声ガイド、ハンズオン等）に遅れ。
3	地域との連携が良好な関係性のもとで行われている。	B	A1人 B5人 C1人	B	B8人	地域住民の活動の場として博物館や蛸塚公園が有効活用されている。	・自治会のイベントや映画会などに会場を提供している。 ・活用のルール等が明確でない。
		B		B		地域との連絡・調整体制が築かれている。	・自治会会合に出席し関係者と随時連絡もしている。

4	各分館が地域の特色を示すとともに課題解決の場となっている。	B	B5人 C2人	B	B8人	分館事業に対する感想や各地域の要望を把握し、課題の改善に努めている。	分館担当者を通じて地域の意向や要望の把握に努めているが、声が届きにくいこともある。
		B		A		分館担当者や指定管理者との定期的な連絡・調整の場を設定している。	年に1回市担当者会議を行うほか、指定管理者とも定期的に協議している。個別の連絡や打合せも適宜行っている。

自己評価

分析・課題	<ul style="list-style-type: none"> ・展示解説や体験学習など、市民が主体的にボランティア活動や事業に参画する場を設けている。若年層のボランティアも一定数存在するものの、平日に主力となる層の高齢化が課題となっている。蛭塚遺跡のガイドが現状で不在なのも課題である。 ・地域でのアウトリーチやユニークメニューの開催は、一時期より要望が増えているが、促進を図るためのルール等が明確になっていないのが課題である。 ・各分館では地域に根差した事業が展開されているが、運営主体の取り組みに差は生じている。
-------	---

博物館協議会委員の評価・意見

<p>【ボランティア】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアの高齢化と固定化を脱し、市民の若年層から高齢者層まで幅広い年齢層が参加できる、あるいは参加をしたくなるような魅力的な活動を行い、誰もが参加できるような敷居を低くする取り組みを実施してもらいたい。新陳代謝を図るため、年限制の導入や公募の方法を見直すなど、改善に取り組んでほしい。博物館のリニューアルを実施する際、ボランティア制度や仕組み再検討の機会になると思う。ボランティア育成や管理にも専任の職員が必要。引き続き人員確保の交渉に期待する。 ・ボランティアの募集・育成・活動の拡充を進めていることや、重文指定答申直後の速報展などを実施していることは評価できる。 ・若年層、中年層のボランティアを積極的に集める必要があると思われる。 ・近隣自治会と良好な関係を保っており、施設利用も進んでいることは大いに評価できる。それをボランティアなどにつなげることはできないか。 ・ボランティアの企画提案による事業は多くないとあるが、企画提案をしてもらうには、やや高度なボランティア養成が必要なのではないか。また若年層、中年層のボランティア養成のためには、養成講座を開催したり、また学芸員による解説などをたびたび聞いてもらうなどの機会を設けてはどうか（ボランティアのインセンティブにもなるのでは）。 ・ボランティアについては、より広く広報に努め、幅広い年代が参加できるとよりよいと思います。近隣に浜松学院大や、浜松北高、浜松市立高などがあるので、ぜひ大学生や高校生なども気軽に参加できるようになるといいと思います。 <p>【社会の課題解決】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・博物館の事業が、社会の課題解決に寄与しているかという項目で、障がい者等の受け入れについて、音声ガイドやハンズオン等、ハード面の遅れが指摘されている。その点については、学芸員や職員の努力というより、資金面の問題であると考えられる。音声ガイドなどは、他の施設などでも一般的になってきているため、導入の必要性をエビデンスを用いて確認し、予算申請などを行っていく必要がある。 ・音声ガイド、ハンズオン等は早めに対応できるとよい。 ・障がい者等の受け入れは、今後の博物館運営において不可欠の課題である。音声ガイドやハンズオン展示など、ハード面での対応が遅れている点については、できるだけ早期に改善を検討していただきたい。 <p>【アウトリーチ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出前講座等の開催件数が非常に多く、博物館からの情報発信が熱心に行われていることは大いに評価できる。 <p>【文化創造】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ピアノコンサートを実施したり、ユーチューブ等の撮影で活用されるなど、博物館事業が、新たな文化創造や社会の課題解決に寄与していることは評価できる。 <p>【評価】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度よりも自己評価の高い項目があり、課題への取り組みがすすんでいることは評価できる。

今後の方策（案）

<p>【市民協働】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現状のボランティアの従事内容の検証を進め、募集方法や意欲向上の取組みの見直しを図る。 ・館内や史跡公園の利用ルールを定めた上で、利用促進のための取組みを行う。 ・分館や地域との対話機会を増やし、地域での協働について調整を図る。 ・アウトリーチを積極的に行いながら、その機会に地域の課題や希望などの把握を図る。 <p>【社会の課題解決】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・館内環境の向上を現状でできる範囲で行い、どのような人でも快適な来館となることを目指す。 ・現代社会における課題について、地域の歴史と結び付けた事業の展開を図る。
--

戦略指標5 情報の発信と公開

・SNSによる情報発信 ・多言語対応ガイドシステム導入 ・観光訪問者への情報提供

定量的評価

No.	内容	単位	R4 実績値	R5 実績値	R6 目標値	R6 実績値	考え方・基準	R6内訳等説明
1	SNSフォロワー数	回	1,936	2,142	2,250	3,269	ツイッター、インスタグラムの年度末時点のフォロワー数	双方ともにこまめな発信を心掛けた。
2	HPアクセス数	件	85,522	68,719	86,000	175,124	博物館HPのトップページアクセス数。広聴広報課で把握	鹿形植輪やSNSで注目された雨乞いのスポット展示の影響か。
3	アップした動画の平均再生回数	回	391	635	500	712	年度内にアップした動画の年度末時点の再生回数の平均値	2本の平均
4	報道取り上げ回数	回	52	32	50	71	新聞・ラジオ・TV・雑誌等の取り上げ回数	TV:8、ラジオ1、雑誌14、新聞26、インターネット22

定性的評価 (A達成 Bおおむね達成 Cもう少しで達成 D達成していない)

No.	評価項目	R5 自己 評価	R5 委員 評価	R6 自己 評価	R6 委員 評価	判断基準	自己評価理由
1	効果的な情報発信の手段や方法が選択されている。	A	B5人 C2人	A	B6人 C2人	・過去の実績やアンケート等に基づき、事業の規模や対象に合った情報発信手段（広報誌、ポスター・チラシ、広告、HP、SNS等）を適切に選択している。	子ども向け事業は広報効果の高いチラシを学校を通じて配布するなど、内容により配布先や部数を変えたり、速報性・ニュース性の高いものはインターネットでの広報を強めにするなど工夫した。
		C		D		・収蔵品検索システム「ある蔵」の、内容の充実と見やすさの改善に努めている。	・掲載内容に一部不備があり、抜本的修正のため休止中
		B		A		・積極的な報道発表を行い、報道機関を通じた情報発信に努めている。	・市政記者クラブのほか、インターネットメディア等にも情報提供を行った。
2	市内外の幅広い層に向けて博物館の周知を行っている。	C	B3人 C4人	C	B4人 C4人	・展示解説やパンフレットなど多言語化への対応を進めている。	・常設展の英訳の修正を行ったが、外国語の音声ガイドやパンフレットは未作成である。
		B		B		・観光施設や宿泊施設等との連携を深め、博物館の広域的な周知に努めている。	・チラシやパンフレットを配架してもらいSNSで相互フォローするなど連携している。 ・新規の相手方をあまり増やせていない。
		B		B		・地域の魅力を紹介することで、地域に対する関心を高めることができたか。	各地域の歴史資源や資料を紹介するよう努めたが、来館に十分つながっていない面がある。
3	博物館の多様な所蔵資料や活動内容についての情報を発信している。	A	A1人 B6人	A	A3人 B5人	・刊行物（図録、博物館報、博物館だより、博物館情報等）が計画通り発行されている。	計画通り発行した。
		B		B		・HP等における事業の動画や資料、収蔵品の情報などにインターネットを活用した来館できない人向けの情報提供に努めている。	・講座の動画配信を行った。 ・「浜松文化遺産デジタルアーカイブ」に資料の公開とフリーダウンロード。 ・来館できない人向けの展開（展示紹介など）が不十分。
		B		A		・SNSでは事業の開催周知だけではなく、日々の活動状況も公開することで、博物館事業への理解が深められるように努めている。	学校移動博物館の様子や販売品の紹介のほか、調査研究や研修など普段市民の目に触れない情報を発信した。

自己評価

分析 課題	<ul style="list-style-type: none">・来館者アンケートの結果からは、来館者の情報源はチラシや広報はままつなど、紙媒体の方が依然として多いが、徐々にインターネットの情報で訪れる人も増えている中で、HPやSNSなどオンラインによる効果的な周知には至っていない。・公開されている収蔵品検索システム「ある蔵」は、見やすさ、使いやすさの面でやや使いにくい面が残るとともに、点検作業の中で記載内容等に不備が一部見つかかり、休止して修正を行っている状況である。
----------	--

博物館協議会委員の評価・意見

<p>【SNS等の発信】</p> <ul style="list-style-type: none">・インターネットの情報で訪れてくれる人がもっと増えると良い。若い人に見てもらえるようにSNSのさらなる活用を。何がバズるかはわからないので。・SNSフォロワー数、HPアクセス数、アップした動画の平均再生回数などがいずれも前年度までと比べ飛躍的に多くなっていることや、それが報道取り上げ回数増加につながっていることは、博物館の意義を地域社会にアピールする意味でも大いに評価できる。・SNSで普段市民の目に触れない情報を発信したことは大いに評価できる。・中長期的な視点で博物館のファン層を増やすため、博物館のコレクションや遺跡に関する学術情報を配信してもらいたい。短期的な来館者増に結びつかなくとも、浜松の歴史裏話や埋蔵文化財の最新研究をわかりやすく、学芸員の言葉で語りかける取組みを地道に続けることが肝要。 <p>【多言語化】</p> <ul style="list-style-type: none">・展示解説やパンフレットなどの多言語化してほしい。・外国語による音声ガイドやパンフレットの整備についても、今後の作成を期待したい。 <p>【刊行物】</p> <ul style="list-style-type: none">・刊行物（図録、博物館報、博物館だより、博物館情報等）が計画通り発行されていることは評価できる。・刊行物を丁寧に出版しているため、その魅力をウェブページ上で発信するなど、未来場者にも来場したいと思わせるアピールにつながることができればいいのではないだろうか。 <p>【収蔵資料情報の公開】</p> <ul style="list-style-type: none">・「ある蔵」の休止はやむを得ないとしても、再開の見通しを示した方がよいのではないか。・「ある蔵」が休止中であることは非常に残念である。早急に復帰する必要がある。・収蔵品検索システム「ある蔵」の休止について、他のシステムの導入を進めるのか、「ある蔵」を再開するのか、優先順位の最上位項目として対応すべきではないか。予算や人員不足がその原因であるとしたら、根本的な改善を図る必要がある。・近年の情報発信における工夫や改善の取組は、高く評価できる。しかし、そのような取組が進む中で、収蔵品検索システム「ある蔵」が休止となっているのは残念である。 <p>【教職員への発信】</p> <ul style="list-style-type: none">・教職員が使用するタブレットパソコンの「みんなの学び」というページに博物館に直接アクセスできるアイコンがない。「必要な情報を探そう」というアイコンから「浜松市文化遺産アーカイブ」を見ることができ、「見返りの鹿」をはじめ多くの資料に触れることはできる。浜松市教委との相談になると思うが、できれば教職員の利用するタブレットから直接博物館にアクセスできるようにするとよい。

今後の方策（案）

<ul style="list-style-type: none">・紙媒体とインターネットを使い分けあるいは共有化して、より効果的な方法を考えながら情報を発信していく。・収蔵資料検索システム「ある蔵」は早急に内容を修正するとともに、別に活用している「はままつ文化遺産デジタルアーカイブ」「文化遺産オンライン」との役割分担を行っていく。・SNSは、市の運用ルールに基づきながら注目される記事を作成し、閲覧者の増加を目指す。また、博物館の通常市民の目に触れない業務なども積極的に発信していく。・多言語化は外部との連携を進め、音声ガイドやスマートホンの解説アプリなどにつなげていく。・教員や児童生徒が学校で利用しやすい情報の公開・発信方法を検討する。
